

大島塾新聞

令和五年一月十五日
柳井市八島沖の初釣り



一月半ばの日曜昼下がり、テレビの前でごろごろしているうち年末年始に録りためた特番のビデオも残り少なくなってきた。そういえばこの日、向根と木村たち数名が柳井の「弁天丸」に乗っていることを思い出し、ちよっかい出すつもりで電話をかけたところ電波が悪く、何を言っているかさっぱり聞き取れなかった。カワハギとアジを狙うと言っていたので、いくらかでも釣ればまた連絡があるだろう、再び寝っ転がっているとウトウトしてきた。携帯がぶるぶるしたが放っておいたら間もなく電話がかかってきた。「アジ持っていないか？」と向根からだった。

この時期になっても未だ脂ののらない瀬戸内天然ブリの不味な身質に落胆もした。この釣りは最初にブリのエサとなる小アジを釣るのだが、残って家に持ち帰った小アジのほうブリよりよっぽど美味かった。そういうこともあって、小アジでも何匹かあれば晩酌の賑わいになるだろうと向根の好意を受けけることにした。

ムロノキ
新聞社
第21号



聞けば向根はこのサイズを三尾にカワハギを何匹か、木村は良型真鯛二尾にアジ一尾の釣果で、このうちの二尾が我が家に届いたわけである。年明け早々良い釣りができてよかったね。心より初春のお喜びを申し上げます。以下今回は木村君のレポートで新春号外をお届けいたします。



港から小一時間かけて到着したのは八島の灯台下というポイントで、船頭から説明を受けた後、「ちよくり」という仕掛けが全員に配られた。古い風呂マットを再利用したと思われる長方形のスポンジ板に巻かれた仕掛けは、いかにも漁師手作り感あふれる無骨なもので、個人的に嫌いではなかった。見たところナイロンテグスの幹糸一〇号、枝六号といったところか。安くて堅牢な漁具の作りで否が応にも期待は高まった。ただ、針先はサビついており、スナップサルカンもサビでいて一抹の不安も感じた。

八島に着くと既に多くの船がおり、目の前の船はちよくりと魚をタモで掬い上げているところで、遠めに見ても大型のアジだと分かった。朝夕マツメは魚の活性が高くもっとも期待が持てる時間帯である。船頭にいわれた通り、仕掛けを底まで落として十秒ほど巻き上げてはまた落とす。船は同じエリアを流しているのですが、すぐに喰ってくるはずだ。しかし、あちこちの船で竿が曲がっているのに、何故かこちらの船ではだれにもアタリがこない。疑心暗鬼のまま時間だけが過ぎ去っていった。

「仕掛けを替えたい」心底そう思った矢先、向根さんが口火を切った。律儀な彼は「カワハギを釣りたいので仕掛けを替えていいですか？」と船頭の了承をとってからカワハギ仕掛けに変更し、私もすぐに続いた。

しばらくして、ついに反対の場所に座っていた石村君が魚を掛けた。なかなかの引きをしており、良型の魚であることは分かった。無事タモに掬われた魚は見事な大アジであった(この日最大寸の五十六センチ)。聞けば船頭に渡されたチヨクリ仕掛けで「底から十メートル巻いては落とせ」を忠実に守っていたという。

石ちゃん56cm巨アジ



仕掛けを替えてしばらくして、ついに向根さんにアタリがきた。大アジを予想させる良い引きを見せており、(向根さんにしては)慎重にやり取りした後水面に現れたのはやはり立派な大アジであった。その後、私の竿にもそれらしいアタリがあったが、途中でふっと軽くなり針外れかと確認してみると四号ハリスが切られていた。すぐさま太いサビキに変更してじっとあたりを待ったが、この間にも向根さんと石村君はさらに大アジを追加していた。気持ち焦る一方で、なんとか一尾だけでも大アジを釣りたいと思っていたところ、ガツンと大きなアタリが...。よし!ん?、明らかにアジとは思えない強い引きで、なんとこれは六〇センチの真鯛だった。

なんかお土産はできたものの、今日は大アジが釣りたい。時合いになったのか、また向根さん、石村君にヒットしたのが大アジ。そして私にもそれらしいアタリ...。慎重に巻き上げたがこれまた真鯛(五〇センチ)。これはこれで嬉しいのだがなかなか本命が来ない。残り時間も少なくなり、いよいよ焦り始めたところ次のアタリ、最後の最後にやっと本命の大アジを手にした。

向根さんが最後にヤズを追加したところで終了時間となった。ヤズは竜田揚げにすると子供たちが喜んで食べるので、真鯛と交換してもらった。釣果を融通しあうのも仲間内で釣りを楽しんだ後の醍醐味である。

冒頭にも記したが一月にこれほどエキサイティングな釣りが楽しめたのは奇跡的で、釣れるアジがどれも五〇センチ前後と大変思い出しに残る一日となった。帰路につきながら、向根さんと相談して福田先生にも大アジを一尾届けようということになり、「アジが三匹釣れたから一匹あげる」とだけ連絡を入れた先生宅へ向かった。

予想通り托鉢の僧侶が持つような小さな金属のポウルをもって玄関先に現れる先生。向根さんがクーラーボックスから取り出した大アジをみて、息をのみ驚愕したのは言うまでもないが、喜びのサプライズ現場というのはいっついても気持ちのいいものである。(木)



まんまと奴らの策略にはまった筆者だった。时期的にはおそらく脂が乗りきる少し前と思われるが身質はしっとりして、噛むとうまみが生み出された。おかげで刺身、フライ、頭のから揚げで日本酒がすすんだ。瀬戸内の大アジは、一尾だけで十分堪能できた。



【編集後記】今回木村の紹介で初登場の石村君は三十代後半(多分)、長身の色男である。セラピストとしては中堅ながら、我々にとっては最年少、数年前から釣りを始めたまだビギナーに近い仲間である。たぶん生真面目な性格なのだろう、筆者と鯛釣りに行った時も今回も、アドバイスを忠実に守り続ける。これが功を奏しているのか、ほとんど毎回いい獲物を手にしている。釣りというものは少し慣れてくると自我が芽生えてきて釣れなくなることが多いが、そこを乗り越えて自分の釣り方ができるようになるまでビギナーから卒業。まだ子育て世代なので五島の釣りには誘えないが、今後時々登場するであろう石ちゃんの成長に期待したい。(福)

gallery



木村は良型真鯛



一尾三千元以上は確実



56センチ巨アジを釣り上げた石村君本紙デビュー